がん看護実践の支援

～看護師の困難感や疑問への取り組み～

坂元敦子（杏林大学医学部付属病院）

我が国のがん罹患率は増加の一途をたどり、国民のおよそ2人に1人は一生の中でいつか、がんの診断を受けるという統計的報告がされている。これほど身近に体験することが多くなったがんであるが、患者や家族のストレスは大きく、一人の力では乗り越えることのできない困難に直面することも多い。看護師は患者や家族の傍にいて、一人一人が最後の時まで自分らしく生きることができるよう支えるものであるが、生命に直結したこの病の看護に際しては、看護師自身もまた困難な体験をすることが少なくない。専門看護師（Certified Nurse Specialist 以下CNS）の役割は患者や家族と向き合う看護師が少しでも自信を得ながら実践できるよう黒子となって支援することであり、困難な問題を抱えた患者や家族のケアを共に実践することを通して、現場を変革していくことが期待されていると考えている。よりよい看護とは何か、日々模索するところではあるが、がん看護CNSとして現場の看護師と共にいる看護実践を紹介したい。

【がん看護CNSの活動内容】

杏林大学医学部付属病院・がん看護CNSは看護部長直属のスタッフで、がん相談支援室の運営を担当しており、病棟、外来、地域など場を問わず必要に応じて自由に活動することを保証されている。がん相談支援室を中心とした主な活動内容は、患者や家族、地域住民、医療従事者からのがんに関する相談へ対応することである。この医療従事者からの相談の中で最も多いのが看護師からの相談であり、この相談に応じる形で教育的活動や実践の支援も行っている。

【“相談への対応”を中心とした看護実践の支援】

CNSへの相談の経緯は主に①現場の看護師から直接依頼される“相談”、②現場の声をCNSがキャッチしたことから“相談”へと発展するものの2つに整理される。CNSとして活動を始めたころ、“相談（コンサルテーション）”は専用の依頼用紙を使用するような正式なシステムとして早急に確立したいと考えていた。しかし現在では、現場のがん看護の質を上げることを目指した

CNSの取り組みの一つが“相談への対応”であるならば、依頼の形式にこだわるよりも、現場で看護師の生の声を聞くことや同じ目線で患者を見ることで、看護師たちの悩みや思いを理解し、看護の目がより大きく開かれていくよう働きかけることが重要であると考え、2つ目の相談の経緯を大事にしている。

具体的な相談への対応は、まず、CNS自身が急いで対応することが必要な問題か否かを見極めるため、ひと通り情報を整理することから始める。看護師の実践の支援とはいっても、そこに存在するのは患者である。看護師の気づきや成長を待つことに気を取られ患者への対応が遅れてはならないからである。情報の整理を行いながら与えられた時間的ゆとりを考え、相談への対応の計画を立て看護師への支援を開始する。看護師への支援のスタートは、困難感を認め共有することであると考えているが、自分の行った看護を過小評価している看護師も多いことから、すでにできていることにも目を向けられるように気をつけている。

看護師への支援の柱はコミュニケーションである。患者を理解しよりよい看護を展開する鍵が患者とのコミュニケーションであるように、看護実践の支援もまた、コミュニケーションをベースにお互いを理解することであると考え、日々の情報交換、ショートカンファレンス、しっかりしたカンファレンスなどをバランスよく取り入れるように気をつけている。これらは、対象となるケースへの理解を深める場であり、CNSのアセスメントを伝える場であり、ディスカッションの場であるが、さらに、CNSと看護師がお互いへの理解を深める場としても重要であると考えている。そして、これらを繰り返し、問題や期待する結果を明確化し、看護計画や看護実践、評価を整理し、よりよい看護実践へとつなぐよう共に努力している。

患者や家族にとって優れた実践家になり得るのはいつも傍にいた看護師である。CNSはその看護師の身近にいる理解者、支援者として、よりよい看護が実践できるよう力を合わせていきたいと考えている。